



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「都市と農村における文化・読書運動と図書館活動」
Author(s)	浪江, 虔
Citation	北海道大学教育学部社会教育研究室報, 1976, 24-27
Issue Date	1977-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28586
Type	departmental bulletin paper
File Information	1976_P24-27.pdf



第2回 北海道社会教育研究会講演要旨

1976 11.20 北海道大学

「都市と農村における文化・読書運動と図書館活動」

日本図書館協会常務理事 浪江 虔

1 図書館と読書運動

(1) 図書館づくり運動の方向

地方自治の大原則は、住んでいる人達が自分達で知恵をしぼり、労力を提供して色々なことをやることである。しかし、自治体がやるべきことをいつまでも肩がわりしてやるというのは、根本的に間違っている。図書館のような仕事は基本的に自治体やるべきもので、自治体のきめの細かさの足りない部分を住民が補完するというふうに発達すべきである。

(2) 日本の図書館史

1) 大日本帝国憲法下の図書館

大日本帝国憲法下において、国民は民草であり、国民の考えるべきこと、進むべき道は全部官僚と官僚に養成された教師が指示する体制であった。

図書館をつくる努力(支配者)は明治の終りから大正にかけてがピークであり、全国で4,000カ所以上となった。しかし、義務教育では忠君愛国をたたきこむことができたのに比べ、図書館は、最低限利用しないという国民の抵抗にあい失敗する。

こうして、義務教育には力を入れるが、図書館は役に立たないという理由で力を入れなくなった。しかしこのことは、図書館にある程度の自由を残すこととなり、その後、教員赤化事件(長野)を契機に中央図書館制度の導入等をした図書館令の大改悪(昭和8年)が行なわれることとなった。

このように、戦前において日本の図書館が発展することは非常にむずかしかった。

2) 戦後の展開

戦後1時期、農村のいたるところで主として青年の手によって、つまり民衆の力による図書館づくりが非常に活発な時期があった。

しかし、本の選択上の問題、適当な本がないなどで、娯楽ばかりになり結局失敗した。

また、私が考えたような農業雑誌のまわし読み会を基礎とする本よみ仲間、それを土台とした部落文庫も残念ながらのびなかった。

このような戦後民主主義、図書館づくりがだめになった原因は2つある。ひとつは、急速な新制中学の建築による地方財政の窮迫であり、ひとつは、世界に例をみない大規模な町村合併、それによる地方自治の破壊である。これによって、すくなくとも相当充実していた公民館、図書館は全部つぶれた。

こうして、日本国憲法、教育基本法、社会教育法、図書館法と理念は民主的な精神をもっているが内容がさっぱり伴わない、という状態の中で「日本人は図書館を利用しない国民である」ということになった。

(3) 図書館運動の弱点

長野県のP.T.A.母親文庫では、「本がない、本がないけど読ませたい」。そこで何人かのまわし読みをするのだが、それで自治体の図書館に対する姿勢が変わったということはない。また、一番悪いのは鳥取県であるが、今もって町立図書館が1つしかない。ほとんど県立である。山梨県においてもこの2年間に資料費が4倍の3,200万円になったのだが、県立図書館ばかりで市町村立図書館の充実に役立つかどうかあぶないところである。県立は町村立が育つようなやり方でやって欲しいものである。

このように、日本の図書館というのは予算が貧弱だという前提にたつてあの手この手というのが非常に多い。

(4) 図書館さえ本物になれば必ず図書館利用国民になる

日野市市長選挙で有山氏（日野市社会教育委員会議長）が当選（昭和40年）する。昭和41年度予算で図書費を1,000万円計上し、6大都市（東京、大阪、京都、福岡、神奈川、愛知）と大阪市、名古屋市、東京の太田区、世田谷区、そこへ人口76,000人の日野市が仲間入りをした。そして2年目には23万冊を貸し出した（当時は1館1万冊が全国平均）。

日野市に続いて町田市、府中市、調布市と図書館活動は発展し、昭和45年東京都の図書館計画による補助によって三多摩の図書館づくりは急速に発展した。

(5) 図書費増は図書館活動の発展の基礎

桁違いの図書費をくめば、図書館活動が発展するというのは三多摩だけに通用する論理ではない。

たとえば、九州では、佐賀県・長野県・大分県・宮崎県などだいたい県庁所在地市が図書館をもっていない。福岡県では昭和51年にやっと福岡市民図書館が設立され、熊本市では、人口40万で資料費8百何十万しかくんでいないというわびしい状況である。

そういう状態の中で、佐賀県の人口75,000人足らずの小さな市、唐津市では昭和46年ごろから飛躍的に資料費をふやし、昭和49年には1,000万円を越えた。この結果昭和47・48・49年と貸し出しがふえ、昭和49年には団体貸し付けと個人をたすと24万冊近くに達し、1人あたり3冊の高水準に到っている。ところが、地方財政の悪化にぶつかり、内部から減額要求がでて、現状維持をはかったわけだが、本の値上がり分だけ本の冊数が減り、きめんに貸し出しが減った（図1参照）。

四国の丸亀市（人口66,000人）も、昭和49年に1,670万円をくみ、みごとに貸しだしがふえ、そして地方財政の悪化にぶつかって、資料費を減らすと市民は図書館から離れはじめていく（図2参照）。

つまり、今の日本の公立図書館の常識的な資料費の5倍組んだら市民から見なおされるということである（この水準からいくと、札幌はここ1～2年の間に1億、旭川・釧路・小樽・函館は5,000万円は組まなければならない）。

図1 佐賀県2市の図書館の比較

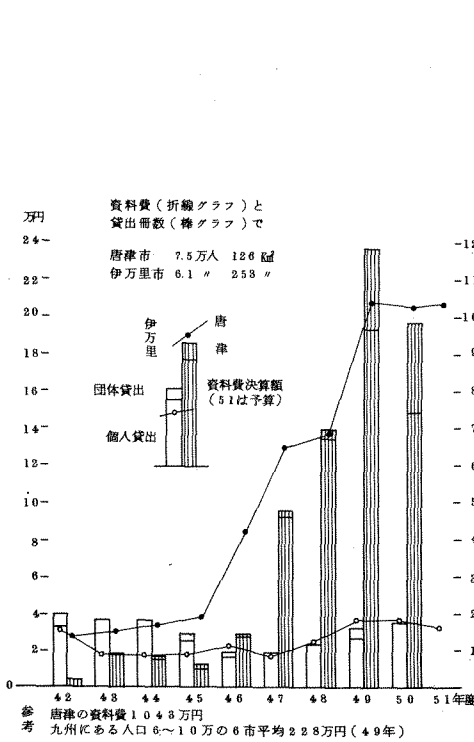
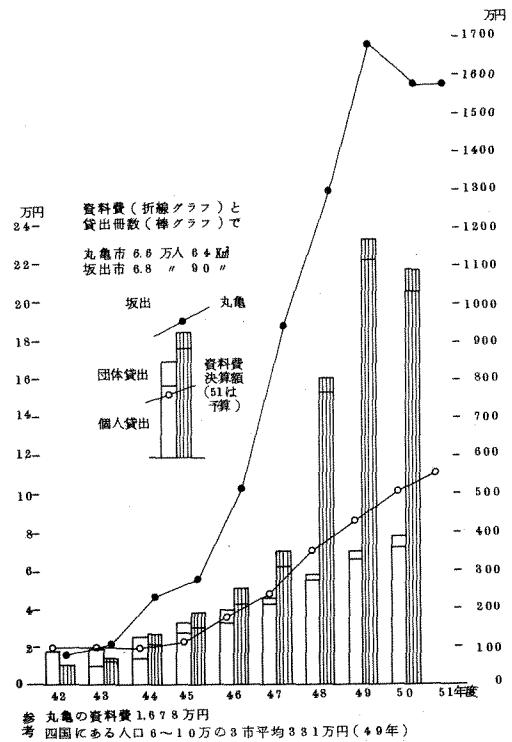


図2 香川県2市の図書館の比較



(6) 住民自治と図書館

一度読んだら用の済む本を買う必要はないわけで図書というのは公共的に利用すべきものである。図書館が内容を吟味してよりよい本を買入れる体制をつくれれば、本のマーケットとして図書館が10~30%を占めるわけで、著者も出版社も誇大広告による売りこみではなく、内容で勝負するようになるだろう。

そして、図書館と利用者住民とのかかわりでいえば、図書館を利用者住民が利用できない状況に、不幸にしておかれている場合は、利用できる条件をつくるべきだ。さらに、そういう条件のあるところでは、積極的に利用することで絶対に後退させないことだ。また、自治体のサービスのゆきわたらない部分を住民がボランティアとしてひきうけることも必要である。

そして、こうした地方自治の具体的実践であり、開拓である、住民が図書館へ積極的に働きかける状況が広範にあらわれてきている。

北海道は、小さな市と町の図書館のモデルをやっていないかなければならない責任がある。

2 農村の読書運動について

(1) 基本的な考え方

県立図書館や市町村立図書館による農村地域へのサービス体制が確立されるべきだが、現在の図書館水準からしては、多少時間を要する。

(2) 読書運動の歴史

農村図書館の基本は、部落文庫づくりと考える。昭和20年代に自主的なグループによる本の入手運動がおこるが、入手活動に価する本、雑誌がなくスボイルされ、その後、自主的文庫づくりが困難になる。

(3) 農協による図書館(室)活動と組合員への普及

① そこで考えたのが農協で、農協は営利を目的としてはやっていないが経営体なので、利益は当然あり、その1/20を組合員に教育施設として還元しなければならないという「教育情報繰越金」というものがある。つまり、農協組合法第10条1項第10条及び51条第4号の規定によれば、「組合員の農業に関する技術、及び経営の向上を計るため教育、または農村の生活及び文化の改善に関する施設」(の事業)を行うことができるとあり、この繰越金を図書室の図書購入費にあてるべきである。

② ところが、その実態は、「農協だより」(機関紙)等の発行であり、また、繰越金の使途そのものが明確でないのが実情である。

「農協の民主化」が叫ばれているが、「農業協同組合法」が正當に運用されていない点にまず、メスを入れるのが先決である。

③ 図書の内容

図書の内容は、農業、農村関係の本は全部買うべきで、本当の専門書は別として、出来れば2組、買うべきである。1組は常備用、1組は貸し出し用にし、資料も同じようにすべきである。

④ 農協図書館の実態

10年前の全国中央会の調査によれば(月刊社会教育に拙稿)、図書を数千冊もっているところは、10農協程度で図書費を10万円以上かけているところも同程度であり、出版(社)の半分は「家の光協会」から自動的に送ってくるのが実態である。

⑤ 読書運動の取りくみ

組合員の説得と努力により、農協図書館を充実させていく事と、自治体と農協との緊密なチーム・ワークの形成により、分担を決め効率的な図書館(室)の充実をはかり、誰でもが利用したい本を、どんどん利用できる条件をつくっていかなければならない。

その第1段階として、農協がその担い手となり、本格的な農村読書施設としてゆきわたらなければならない。

(これは、講演内容の要旨です。限られた紙面のため、浪江氏の講演内容を十分にはくみとれていないことをおことわりしておきます。なお、戦前からの浪江氏と図書館運動とのかかわりについては割愛させていただきました。)

(文責 大学院修士課程 千葉 悦子)